大慈寺（糠塚）調査報告書－２

本　堂

本堂及び右遶三匝の円形石畳

調査員　月舘　敏栄

調査期間　平成２９年９月４日～１１月６日

大慈寺(糠塚)本堂　調査結果の概要	
1．文化財の種類	県重宝（建造物）
2．名称及び員数	大慈寺(糠塚)　本堂　一棟
3．所　有　者	宗教法人　大慈寺　住職　吉田　隆法
4．所　在　地	八戸市長者一丁目６－５９
5．建築年代等	文化二年(1805)（棟札）　大棟梁　上野与惣治福重
6．規模及び構法	(1) 建築形式　木造平屋建て (2) 屋根形式　鉄板葺き入母屋屋根（当初は、茅葺寄棟屋根） (3) 構造形式　木造軸組在来構法、和小屋組 (4) 面　　積　延床面積　２５２．７１５㎡ (5) 規　　模　桁　行　　１７．１８８m 梁　行　　１４．７０３m 軒　高　　約　６．１００m 棟　高　　約１４．０m (6) 意　　匠　内陣外陣の柱頭及び中備に和様の出三斗の組物及び折上格天井の特長をもつ。当初の茅葺寄棟屋根を活かした唐破風向拝及千鳥破風付入母屋屋根に改修された。
7．沿　　革	大慈寺(松館)の宿寺として創建された大慈寺(糠塚)の本堂は、文化二年(1805、棟札)に再建され、昭和30年(1955)に唐破風付向拝及び千鳥破風入母屋屋根に改造し、現在に至っている。
8．建築的特色	(1) 形　　式　唐破風付向拝に千鳥破風付入母屋屋根の本堂は県内にはない形式である。 (2) 構法的特徴　内陣及び外陣境に丸柱を立て、虹梁を掛けて頭貫に台輪と支輪で折上格天井を支える構法は優れている。 (3) 意匠的特徴　内陣及び外陣は折り上げ格天井に柱及び束上部に和様の出三斗を組み、小壁に透彫りを嵌めた優れた意匠。
9．保存状況	茅葺寄棟屋根に和様の出三斗に折上格天井の優れた意匠を活かした上で、昭和30年(1955)に唐破風付向拝及び千鳥破風入母屋屋根に改造した。地震等で剥落した漆喰壁も修復されている。
10．類似文化財	向拝及び千鳥破風付入母屋屋根の重文として岩木山神社本殿があり、法眼寺本堂（県重宝、黒石）は来迎柱に出三斗を組むが中備は蟇股で、出三斗組を中備えまで組んだ本堂は県内にない。
11．指定理由	文化二年(1805)本堂建築を示す棟札が残る本堂内部に和様の出三斗を円柱及び中備に組んだ意匠は県内にはなく、改修を受けながらも当初の特長をよく継承している本堂として県重宝に相応しい建造物である。

大慈寺(糠塚)本堂　調査報告

1．文化財の種類　　県重宝（建造物）

2．名称及び員数　　大慈寺(糠塚)本堂　１棟

3．所　有　者　　宗教法人　大慈寺　住職　吉田　隆法

4．所　在　地　　八戸市長者一丁目６－５９

5．建築年代　　文化二年(1805)（棟札あり）
及び棟梁　　上野　与惣治福重（棟札あり）

6．規模及び構法

(1) 建築形式　　木造平屋建て
(2) 屋根形式　　唐破風向拝及千鳥破風付鉄板葺入母屋屋根（当初は、茅葺寄棟屋根）
(3) 構造形式　　木造軸組在来構法、和小屋組
(4) 面　　積　　延床面積　２５２．７１５㎡（７６．５８坪）
(5) 規　　模　　桁　行　　１７．１８８ｍ（９間２尺７寸４分）
梁　行　　１４．７０３ｍ（８間０尺５寸３分）
軒　高　　約　６．１ｍ　　（３間２尺１寸）
棟　高　　約１４．０ｍ　　（７間０尺９寸）
＊但し、１間＝６尺＝１８１８㎜で換算
(6) 意　匠　　内陣及び外陣に折上格天井の柱頭及び中備まで和様の出三斗を組み、小壁の彩色透彫も優れたものである。当初の茅葺寄棟屋根を活かして昭和30年(1955)に唐破風向拝・千鳥破風付入母屋屋根への改造も県重宝にない意匠の本堂として貴重である。

7．沿　　革

大慈寺(糠塚)は、大慈寺（松館、山門：県重宝）の八戸城下の宿寺として延宝年間(1673-1681)に四世明鑑幡察和尚が長者山南側裾野に創立した曹洞宗の寺である。

現在の本堂は、棟札によると文化二年(1805)に大棟梁上野与惣治福重により建てられた茅葺寄棟屋根であった。「糠部五郡小史」(明治40年、1907)に寄れば、本堂の規模は桁行９間４尺５寸、梁行８間１尺２寸で、現状との差異は改造等によるものである。当時の伽藍は本堂・庫裡に加えて観音堂や鐘楼もあったことが古記録から伺える。また、本堂前庭には、右遶三匝用の円形石畳も石の風化状態からの当時の設えと推定される。境内も整ったこともあり、天保元年(1830)頃に松館大慈寺の宿寺から本寺に格上げされた。

昭和３０年(1955)に日本の名工として名高い中村松太郎氏の設計兼監督により、当初からの特長を継承した上で唐破風向拝付及び千鳥破風付入母屋屋根に改造された。当時の改

修内容に関する記録は不明であるが、棟札に記載された職種は<大工・柾葺・彫刻・鈑金・左官・鳶>であることから、屋根に加えて向拝廻りや内陣小壁の一部透し彫りを行ったと推定される。

写真－１　文化二年(1805)の棟札

写真－２　昭和３０年(1955)の棟札

福聚山大慈寺には、昭和30年(1955)の大改修を祈念して作られた絵葉書が残されている。改修前は茅葺寄棟屋根に葺下げの向拝を設えている。向拝には虹梁が掛けられ、木鼻は象の阿吽彫刻である。向拝の両側には菱格子の窓がある。

唐破風向拝・千鳥破風付入母屋屋根に改修しただけでなく、唐破風には向鶴の阿吽の彫刻を飾り、虹梁及象の阿吽の木鼻彫刻は再使用されたと思われる。向拝両脇の菱格子の窓も残されている。

また、漆喰壁及び軒回りの出三斗組もそのまま継承されているので、唐破風付向拝及び千鳥破風付入母屋屋根に改修されたものの、当初の特長をよく継承している。

写真－３　茅葺寄棟屋根の本堂（向拝に虹梁・阿吽の木鼻彫刻が付く）

写真－４　唐破風向拝・千鳥破風付入母屋屋根に改修

写真－５　八戸南部家の家紋に因む向鶴の唐破風拝飾

写真－６　海老虹梁や雲形模様の持送腕木を追加したが、軒組は改造なし

現在の内陣及び外陣は、約２１０年の歴史を考えると汚れの少ない印象を受ける。しかし、折上格天井及び出三斗の組物廻りを観察すると、天井支輪や出三斗の一部に洗浄跡が残り、組物の奥に煤の汚れが溜まっていること、天井板に雨漏り跡が見られることなどから昭和３０年(1955)の大改修時に本堂内部は当初のままに洗浄したと推定される。

写真－７　天井支輪に洗浄跡が見られる

写真－８　天井板に雨漏り跡が残っている

本堂創建後、約２１０年余りに多くの大地震を受けてきたが、最も被害が大きかったのは、平成6年(1994)の三陸はるか沖地震で本堂内部の漆喰壁が剥離・落下したが、東日本大震災では軽微な被害だけであった。

昭和３０年(1955)に向拝及び屋根廻りの大改修を受けたが、外観では建築当初の軒回りや窓の特長を継承し、内部も洗浄を施したが、本堂創建時の中備まで出三斗を組み、内陣及び外陣の円柱を彫刻付虹梁で固めた構法的特長を良く残している。

８．建築的特色

(1) 本堂の規模

昭和30年(1955)の屋根改造時に向拝回りや広縁に手を加えられているが、本堂の縁廻りを除く間口は九間、奥行七間半余りで、明治４０年(1907)の「糠部五郡小史」に記載され

た規模（９間４尺５寸×８間１尺２寸）との違いは改造等による違いと考えられる。

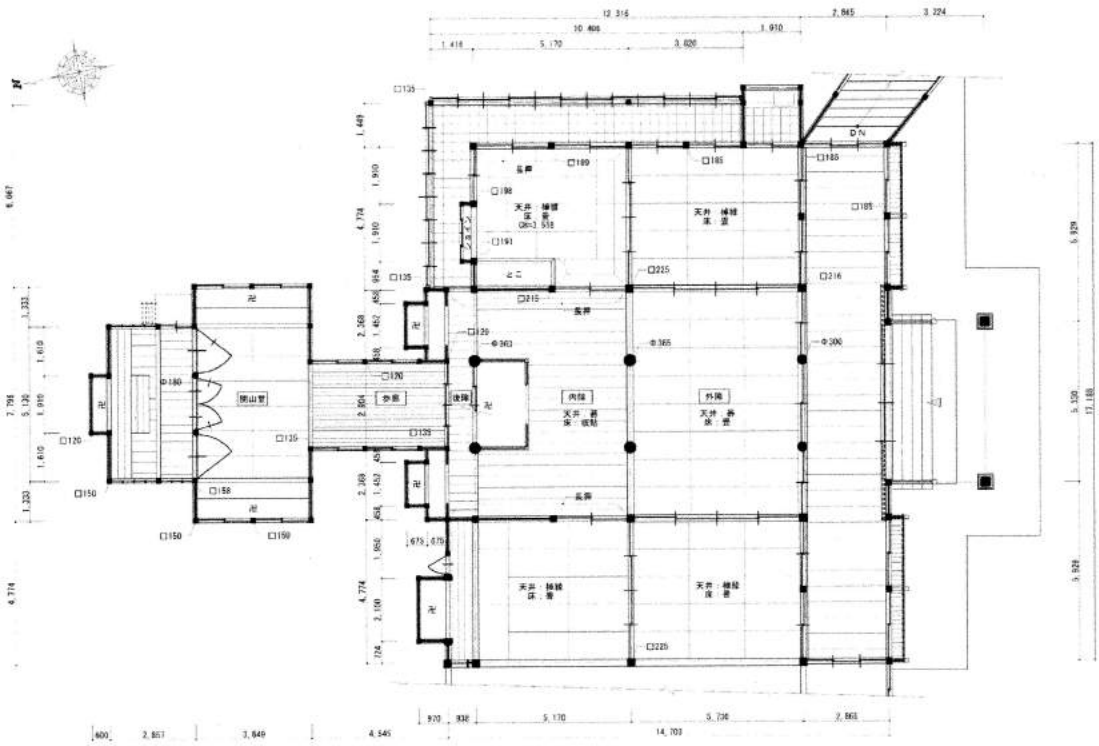
本堂の唐破風向拝の棟高は約 8.5m、千鳥破風棟高は約12.05m、棟高は約14mである。棟高がやや低めなのは、元茅葺屋根の小屋組を活かしたためと推定される。

(2) 空間構成

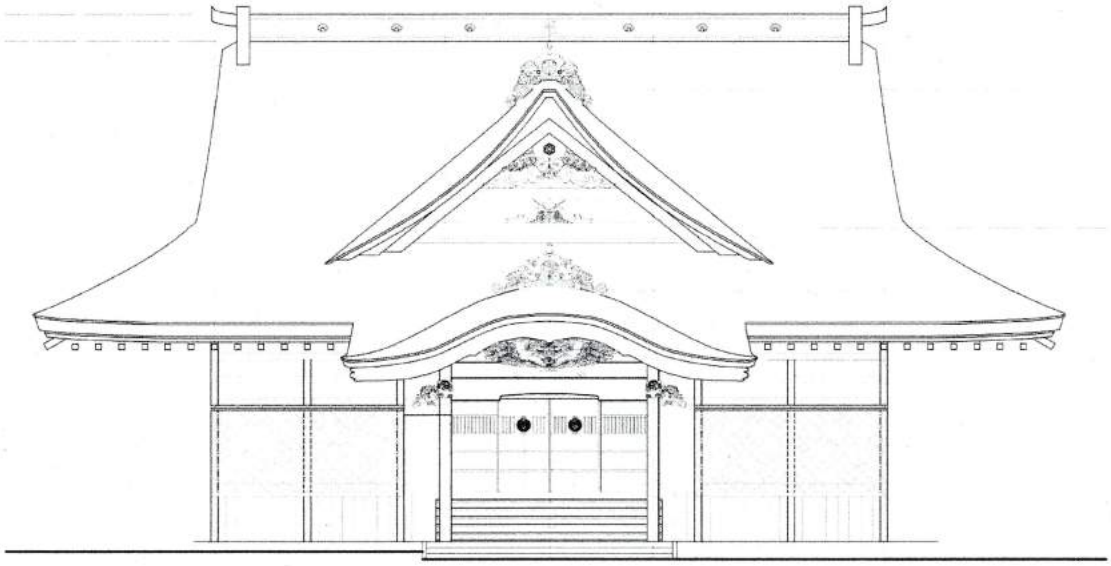
建築当初は茅葺寄棟屋根であったが、昭和30年(1955)の中村松太郎氏の設計兼監督により、現在の唐破風向拝及び千鳥破風付鉄板葺入母屋屋根に改造されたが、本堂の向拝・広縁・大間（外陣）・東序・西序・内陣・室中の間取りは当初のままである。

向拝を登り、虹梁のかかる広縁に入ると高さ３間(5.39m)の天井の向拝側が化粧屋根裏なのは茅葺屋根の架構を活かしたためと推定される。広縁から一段高い大間（外陣）とは直径１尺(303mm)の円柱で仕切られ、須弥壇のある内陣は更に一段高くなっている。内陣には須弥壇が設えてある。来迎柱や虹梁上の欄間には彩色の龍や透し彫りが空間を豊かにしている。その奥の渡り廊下が開山堂に繋がっている。この渡廊下も昭和30年の改造と推定される。この間取りは、県重宝の円明寺や寶福寺と類似している。

庫裡、開山堂や復習会館との接合部は改造されているが、本堂内部はほぼ当初の様子を良く継承している。



図－１　大慈寺(糠塚)本堂及び開山堂間取り



図－２　大慈寺(糠塚)本堂立面

写真－９ 円柱と虹梁と透彫の本堂内部

写真－10 彩色の透彫や龍の彫物の須弥壇

(3) 構造

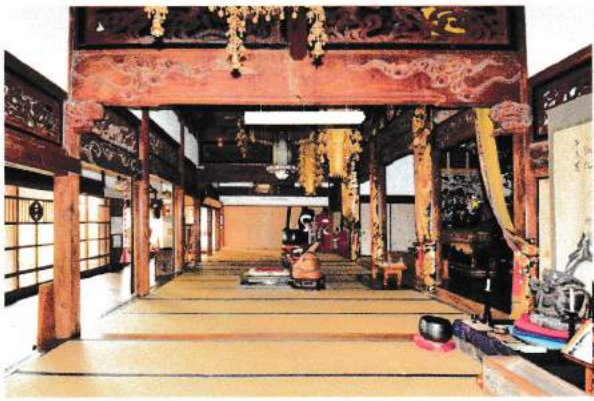
本堂内部に顕れている架構は限られている。広縁上の架構は茅葺き屋根時代の出桁を虹梁で受けて軒天を貼り、軒側に太い化粧垂木を顕している。

広縁と外陣及び内陣境の間口４間を３分割した位置と来迎柱に直径303㎜余りの円柱を建てて、小屋組の陸梁が掛けられていると推定される。折上格天井を支える木鼻付出三斗を各柱頭及び束頭に組み、丸桁で出三斗を繋いでいる。

虹梁上には彩色透彫や黒漆塗の欄間枠などは昭和３０年の改造時と推定される。

(4) 意匠

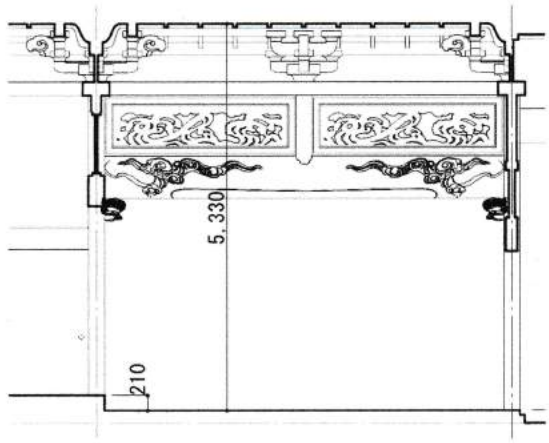
曹洞宗の大慈寺本堂は、円柱上部の出三斗などの組み物や浮き彫りのある蟇股に紅梁などの意匠、円柱を繋ぐ内法長押・腰貫・台輪などに禅宗様の建築的特徴が施されているが、折上格天井の丸桁を出三斗で受けるなど和様の影響が見受けられる。



写真－11　内陣及び外陣を固める円柱と虹梁

写真－12　広縁上部の虹梁と化粧垂木

写真－13　外陣の虹梁・透彫・折上格天井



図－３　外陣の柱間を折上格天井・出三斗・透彫・虹梁で固めた意匠

９．改造及び保存状態

(1) 改造

本格的大改修は昭和３０年(1955)に日本の名工１００人に選定された中村松太郎氏（八戸市出身）による設計兼監理で茅葺き屋根から唐破風向拝及び千鳥破風付入母屋屋根に屋根を掛け替えたことである。この際、正面の建具や室中廻り縁側と建具を生け替えたと推定される。更に、本堂奥の開山堂と渡廊下で繋いだ。また、昭和５２年(1977)に薬師堂を福聚会館に建て替えた折に福聚会館との接合部の壁等を撤去し、現在の形に改造された。

平成６年１２月２８日(1994)の三陸はるか沖地震では本堂の漆喰壁が剥離・落下したが、修復して現在に至っている。

(2) 保存状態

昭和３０年(1955)に屋根回りと外回りの建具を中心に改造を行っているために雨風による建材の目立った傷みは見られないが、山側の土台や束・貫などに腐蝕が生じている。

内部の汚れも少なく、1994三陸はるか沖地震で被災した漆喰壁の修復も行われ、透し彫りや虹梁、出三斗などの組物の傷みも殆どなく、保存状況は良好である。

１０．類似文化財

大慈寺(糠塚)本堂の特長は、唐破風向拝及び千鳥破風付入母屋屋根の外観と外陣及び内陣に虹梁及び透彫を廻し、質実剛健な折上格天井を太い丸桁受けた出三斗組で受けていることである。この唐破風向拝及び千鳥破風付入母屋屋根に類似した重文に岩木山神社本殿がある。小規模ではあるが、重厚な印象である。

空間構成や規模が類似した県重宝に円明寺や法眼寺があるが、来迎柱上部に出三斗を組む程度で中備は蟇股で、出三斗などの組物ない。

写真－14　岩木山神社本殿（重文）
（唐破風向拝＆千鳥破風入母屋屋根）

写真－15　法眼寺内陣（県重宝、黒石市）、
（来迎柱に木鼻付出三斗を組む）

１１．指定理由

文化二年(1805)、再建の棟札が残る福聚山大慈寺本堂は、曹洞宗らしい間取りに折上格天井に出三斗組を内陣及び外陣の柱頭及び中備までに配する意匠を施しており、他の県重宝寺院本堂に見られない特長を持っている。昭和３０年(1955)には、日本の名工１００人に選定された中村松太郎氏が設計兼監理して、本堂の特長を継承した上で唐破風向拝及千鳥破風付入母屋屋根を掛けたことも福聚山大慈寺本堂の特長を残した改造と評価できる。

大慈寺(糠塚)本堂は、文化二年(1805)再建時の特長を残し、保存状態も良好であるので、県重宝に相応しい建造物である。

１２．文献

(1)「青森県の近世社寺建築　(I)、(II)」
(2) 文化財シリーズ「第28号 八戸の社寺建築 上」、「第29号 八戸の社寺建築 下」
(3)「曹洞宗　糠塚福聚山　糠塚大慈寺　写真と年表」
(4)「八戸糠塚　福聚山　大慈寺　寺誌」
(5)「青森県史　文化財編　建築」